会員だより

「初年度を振り返って」

秋田県由利地域振興局建設部
企画調査課企画調査第二班
技師
成田　拓未

1．はじめに

私は今年度新規採用として秋田県庁に入庁し、由利地域振興局建設部に配属され、現在は企画調査第二班として主に河川災害復旧工事や伐木といった工事を担当しています。由利地域について簡単に説明しますと、場所は秋田県南西部に位置し、由利本荘市、にかほ市の２市からなっています。人口、面積ともに全県の１割を占め、特に由利本荘市については全県１の面積を持っています。後述する海岸災や河川災など、災害が多い地域ではありますが、鳥海山や海水浴場など、山・川・海の多様な自然に溢れ、美しい景色が広がっています。また食べ物も美味しく、Ｂ級グルメとして有名な本荘ハムフライだとか、海岸線もあることからにかほ市象潟の道の駅で食べた岩ガキなどは絶品でした。秋田県にお越しの際はぜひ由利地域に足を運んでいただきたいと思います。…とはいったものの私自身は県北の出身で、同じ県内とはいえ知らない地域、知らない特色も多いことから、早くこの由利地域に精通したいと思っています。

公務員となって早１年が経とうとしていますが、まだまだ先輩の後ろをついていくばかりで、毎日勉強の日々が続いています。入庁して日が浅い中、こういった場に文章を載せていただくことは恐縮ではありますが、こうして依頼が来たのも何かの縁。これまで経験したことの中で感じたこと等を拙いながらも書かせていただきたいと思います。

2．爆弾低気圧

公務員となって自分が初めて体験した災害は、４月１日採用となってからわずか２日後のことでした。以下に概要を記します。

秋田県では４月３日の午後から南より風が強まり、寒冷前線が通過した３日夜のはじめ頃から西よりの風に変わって、引き続き強い状態が翌日夕方にかけて続きました。

最大瞬間風速がアメダス秋田で40.8m/s、本荘で40.0m/sを含むすべてのアメダス観測所で４月の観測史上１位を更新するなど、県内全域で暴風となり、海上でも猛烈なしけとなりました。

秋田県のアメダス観測地点のうち、半分弱の観測所で年間を通して１位、半分強の観測所で最大風速15mを超え、前代未聞の大荒れだったことがわかります。

秋田県沿岸では気圧の低下と吹き寄せに加え波浪の影響で潮位が高まり、高潮警報基準を超える高潮となりました。

これらの暴風等により秋田県では、負傷者15名の人的被害が発生した他、住居破損や停電など多くの被害が発生し、航空や鉄道などの交通機関にも大きな影響がありました。

低気圧が襲来した翌日、まだ慣れない通勤道中では電波塔が曲がっていたり、写真のようにガソリンスタンドの屋根が吹っ飛んでいたりと、今回襲来した低気圧の強大さを物語っている風景が広がっていました。それと同時に、まだまだ学生気分が抜けておらず「学生なら休みでゆっくりできるだろうな」などと考えながら歩いていたことも覚えています。土木系の技術公務員ということで、仕事自体は忙しそうだと思っていましたが、この時はまだ公務員は定時で帰れるというイメージを

会員だより

持っていた頃でした。今にして思えばなんとのんきなことでしょうか。４～６月にかけていかにその考えが甘かったかを思い知ることになります。

3. 災害査定に向けて

図面折りや色塗り、先輩方の現場にくっついて回る日々が続く中で、「査定」という言葉を聞く機会が多くなりました。それに付随して被災のメカニズム・モクロミ・デーハイ・スイダシ…などなど耳慣れない言葉が飛び交い当時は「皆さん何を話してるんだろう」と思ったものです。まず言葉の意味が分からなければ何も始まらないので、とりあえず暇さえあれば災害手帳を開き、わからない単語はインターネット等で検索して調べることを心がけました。それでもまだまだ分からないことだらけですが、早い時期からこういった習慣を身につけることができ、災害手帳に慣れ親しむことができたのは非常に大きかったと思います。

現場調査の末、今回の査定にて申請することが決まったのは離岸堤の沈下が見られた西目海岸２箇所と本荘海岸松ヶ崎、護岸や消波堤の被災があった本荘海岸浜三川の計４箇所で、合計で11億を超える申請額となりました。写真は本荘海岸浜三川の被災状況の一部です。当然このような金額に今まで縁があったはずもなく、全く想像もつかないような金額でしたので、初めのうちはいまひとつピンと来ないまま業務を行っていました。しかし改めて考えてみると、申請が無事に行われればその時間とお金の分が単純に県と地域に対して貢献できることになり、そういった意味でとてもやり甲斐のある業務だということが感じられました。

4. とにかく写真整理

今回の査定に向けての資料作りにて、私が主に手伝わせてもらったのは被災状況資料作成に関する業務でした。現場に出るとまず「写真を撮ってくれ」と言われてカメラを構えてみるのですが、何をどう撮ればいいのか分からず、とりあえずシャッターを押してみるばかりでした。そしていざ持ち帰って撮ってきた写真を整理しようとすると、「この写真はどこで撮ったっけ…」だとか「これじゃ状況がよくわからない」などといった問題が噴出し、ただ撮るだけではなんの意味もないことを学ぶところから始まりました。

そうして業務を続けていくうちに、先輩からまず大前提として「査定時に初めて現場に来る査定官や立会官が被災状況をわかりやすいような写真を撮る」ということを学び、「まず全景を撮ってから詳細部について撮る」ことや、「どこで撮ったか分かるよう測点などを入れて撮る」などのアドバイスを受けてようやく写真の撮り方、被災状況整理の仕方が理解できてきたかと思います。具体的には、護岸傾倒状況についてはスラントを当てて勾配を調査し、水叩沈下についてはコンベックスやポール横断などで調査、護岸亀裂についてはスプレーで明瞭にした後に写真を撮るなどといった内容で写真撮影、状況整理を行いました。

査定で即座に見ることが出来ない部分を説明して理解してもらうためには、やはりわかりやすく被災状況が写された写真が必要です。申請をスムーズに行うための重要な役割を体験できたことは、これからの業務において活かしていくことはもちろん、より良い写真の撮り方ができるよう努

会員だより

力することに繋げていきたいと思います。

また、被災状況資料のための写真整理についてもなかなかうまいこと説明しやすい、理解しやすい資料にすることができず非常に苦労しました。資料を作っては先輩に添削してもらい、また作っては先輩に見てもらいの繰り返しでなんとか作成していきましたが、そのために多大な時間を先輩に割かせてしまったことを反省しています。もちろん時間を割いてもらったのはここだけのことではないのですが、次は今回よりもっと良い資料を短時間で作れるよう頑張りたいと思います。

5. 公務員だからといって…

そして何より大変だと感じたのが、残業の多さでした。前述でも触れましたが、当時は忙しさこそあるものの残業はそこまで多くないだろうと考えていたこともあって、通常時も含めこれほど残業があるのかと衝撃を受けたことをよく覚えています。日付をまたぐことも多々あり、ちょっと折れそうな時もありましたが、先輩方が黙々と資料作りに臨んでいるのを見てなんとか自分もついていこうとモチベーションを維持することができました。入っていきなりの残業ラッシュで確かに大変な時期ではありましたが、真っ先に体験してこうした業務体制に耐性をつけられたことは、振り返ってみると大きかったと思います。お陰様で多少の残業も苦にならなくなりました。

6．ついに査定へ

査定までの2カ月もあっという間に過ぎ、ついに査定当日を迎えます。私は主に計測班としてポールを片手に走り回ったり、資料持ちをしたりしながら、初めて実際に行われる災害査定というものを勉強させてもらいました。

第一印象としては、今まで作成してきた資料を元にして、それぞれの箇所をスラスラと説明していく先輩方の姿を単純にカッコいいと思ったことでした。「こういう風に自分も説明できるようになるのだろうか」と不安に思いながらも、査定官の疑問に対して素早く行動を起こし、どんどん申請箇所をクリアしていく先輩方の姿を見て、「こうなりたいな」と感じるようになりました。具体的には、護岸基礎部の露出を証明するために即座にはしごで下に降り、ポールを挿して説明していた姿がとても印象的で、言葉だけでなくこうした行動で説明する能力も重要なのだということを学ぶことができたと思います。

そうして無事に査定は進み、初めての災害査定はひとまず終了となりました。その3カ月後、今度は自分が説明役に回ることになるとはこの時点では思いもしませんでした。

7．二度目の「初めての」査定

大分残業も落ち着き、職場にも慣れ始めた頃の7月頭に河川災害が発生しました。由利本荘市東由利にある観測所では5日から6日にかけて雨が降り続き、累加雨量95ミリを観測しました。その影響で河川の水位が上昇し、所々で洗掘による堤防の被災や護岸背後の吸出しなどといった被害がありました。由利地域振興局としては結果的にこの被災があった松沢川3箇所を申請することとなるのですが、比較的難しい現場ではなかったこと、丁度20代前半の若い職員が自分を含め3人いたこと等から、それぞれ1箇所ずつ担当することとなり、初めて自分で説明する査定に向けて動き始めることになりました。言われた当時は不安に思いつつも、早いうちに経験として査定を受けてみたいという気持ちもあったため、丁度いい機会だと思って向かうことができたと思います。

再び災害手帳や先輩に進めてもらった災害復旧申請・応急復旧の留意点（社団法人全国防災協会発刊）などとにらめっこする日々が始まりましたが、前回の海岸災に比べて非常にゆとりのあるスケジュールで動くことができ、同じ災害査定を受けるにあたっても災害によってここまで違うのかと感じた記憶があります。とはいえ査定の日時が近づくにつれ不安も大きくなっていき、何度も被災のメカニズムを確認したり査定時の流れを確認したりと自然と残業する時間が増えていきました。自分ではわかっているつもりでも、いざ先輩に突っ込まれてみると言葉が続かなくなったり、違うことについて説明してしまったりと、申請者としての難しさが身に染みて感じたことを覚えています。

会員だより

そうして迎えた査定当日、私は３人の中で最後の順番となりました。先輩２人の申請を見つつ頭の中で揃えてきた資料を反復しているうちに、自分の現場が回って来ました。まず始めに心がけていたことは､ハキハキと大きな声で申請すること。査定官にいい印象を与えることも重要だということを先輩から聞いていたので、まず元気よく申請しようと査定に臨みました。加えて１年目だというアピールをしたら優しくしてもらえるかもというアドバイスも聞いていたので､「１年目の成田です！よろしくお願いします！」という言葉を皮切りに申請を始めました。ちょっと余計な一言だったかなという気もしますが、いくらか緊張をほぐすことができたと思います。そうして申請は進み、不手際な所は多々あったものの、最終的には３箇所ともカット無しで無事初めての査定を終えることができました｡災害査定の流れや緊張感を、自らが申請者の立場で体験できたことは非常に有益であったと感じています。

８．おわりに

これまで、公務員初年度に経験した２つの災害について主に書かせていただきました。つらつらと感想を並べただけの文章で大変恐縮ですが、この１年で体験してきたことを振り返るいい機会となり､「月刊防災」への寄稿依頼をいただけたことに関して感謝の意を示したいと思います。

この１年間を通して、災害に対する意識が今までと180°変わりました。昔は大雨や強風というとまるで他人事のように「大変そうだな」くらいに思っていたのが、いざ対策に当たる側になってみるとその裏にある業務の多さ、復旧に向かうまでの苦労、地域住民の切実な願いなどが目の当たりになり、災害が与える影響の大きさを日々再確認しながら業務を行っています。

これからも様々な種類、様々な形態の災害と立ち向かっていくことになろうかと思います。今行っている業務はすべて県や地域住民の方々への安心した暮らしにつながっているということを忘れず、この初年度に経験した気持ちを忘れず次に活かしていきたいと思います。

最後になりますが、今回の２度の災害査定時のみならず、平常時も業務の合間を縫っていろいろなことを教えてくださっている先輩方にこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。また、各地で災害復旧に向けて邁進されている皆様に対して、無事に復旧作業が終えられることを微力ながらも祈念しております。それでは、最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました。